五三会

広島工業大学建築学科同窓会
第12号　昭和60年度版

五三

目　次

五三会のために ……佐藤重夫…… 1

綾　の　糸 ……中塚晴夫…… 2

「五 三 会」 ……田中康夫…… 3

道路と敷地の高低差を利用 ……渡辺武産…… 4

作　　品 ……山中勝行…… 6

作　　品 ……村上　徹…… 7

作　　品 ……有馬秀宜…… 8

主　と　住 ……河内浩志…… 9

ＯＢだより ……竹内　誠　渡邊誠司 11

現役生だより ……種谷芳生　三島久範 12

目　　次

第10回五三会コンペ報告 …… 13

第11回五三会コンペ作品募集 …… 19

第12回総会のお知らせ …… 20

昭和59年度内定者一覧表 …… 21

広島工業大学建築学科教員及び非常勤講師名簿 …… 23

五三会活動報告及び決算報告 …… 24

「五三会」会則 …… 26

母校だより …… 28

役員の変遷 …… 29

五三会11号スポンサー一覧表 …… 30

編集後記 …… 32

五三会のために

広島工大建築主任教授　佐藤　重夫

建築の工学技術、材料等の全ては日進月歩に進んだ。結構なことである。しかして、真に建築とは何かが、今また大きく問われていることも結構なことである。良い建築、美しい建築、心に響く建築、われわれの建築、日本の建築、これらはどうなんだろうかとも思われている。また個々の建築ではなくて、建築をこめての環境、人とものとの環境が真にどうあるべきかで建築界はまた一段と大きな課題になっている。

しかしどんなに大きくても、またどんなに小さな個々の家であっても、古くても新しくても建築が技術と芸術に全て関っていることを忘れることはできない。それは全てが現実の氷れる音楽なのであって、どんな小さな関りをその建築というものの一部に持っていても、このことだけは忘れたくない。心のこもるものか、否かがそれを分別して向上せしめるか、否かになる。心あるもの、そして使うもの、それが建築であるということだけは忘れないようにしましょう。五三会の諸君、心はずませて、これがまたわれわれの誇りなのです。諸賢の発展を礼りたい。

昭和60年3月1日

「綾　の　糸」

五三会 会長　中塚晴夫（44年卒）

会員の皆様には、ご健勝にてお過しのことと存じ上げます。在学当時は、学外での交流をそっちのけにして、学外での時間帯が生活の大部分を占めておりましたし、社会に出てからも4、5年は、大学とは縁の無い時期でございましたが、五三会が発足してより大して役には立たないお手伝いですが、参加させていただいて、早や12年目になりました。

昨年の11月末には、近畿支部総会に、佐藤重夫先生、天満祥弥先生、佐藤立美先生、方と共に出席させていただきました。平口祐二支部会長を中心にして、和やかな雰囲気のうちにも活気に満ちた楽しい1日を過ごさせていただき感謝いたしております。

近畿支部が誕生して3才を迎え、今又、関東支部(？)の誕生も陣痛期に入いっております。地区なり、職場なりの場で、同窓の方々が集うことは、皆様が各職場にて厳しい状況を乗り切っていかれる支えの一端を担うものであろうと存じます。情報交換の場であり、時には仕事を離れ、ほっと一息入れる場ともなります。意外な方が同窓であったり、同窓の方が極く身近に居られたりすることも多々あります。ひとつの織物を織っていく時、仕事が縦の糸なら家庭は横の糸となるのでしょうが、同窓の集いはさしずめ斜めの糸となり、主とはなり得無くとも、要の役目としては大きな期待が持てるのではないでしょうか。

社会状況もあらゆる分野が、21世紀を目指して脱皮することを考え模索しております。

人間の手足であった機械も、今や自立し独り歩きを始めようとしておりますし、情報産業の分野の著しい進展はこの現象へ拍車を駆けるでしょう。使用する側の要求に応えるだけにとどまらず情報産業の分野は、社会のリーダーシップを手中にするべく進行中なのです。このような状況に対応し、コントロールし得る術を身に着けていかなければ、主客転倒の憂き目をみるかも知れません。この術については、皆様のご活躍に期待する処大なのでありますが、一つの方向として原論の分野のより一層の充実を計ってゆくことがあるのではないでしょうか。

私達の祖父母、両親の時代には、生活の環境は自然に満ち満ちておりました。と言うより、自然の中で育まれ、自然とは無関係には生活し得なかったのですが、今、私達の子供達を取り囲む環境でそれらしい状況を捜し出すことは逆に困難となりつつあります。この間わずか50～60年の才月しか経っていないのです。子を育くみ、社会の担い手となられていく皆様の生活の基本形態は何処に横たわっているのでしょうか。日常生活の場に、その認識の土壌は案外と在るようです。

縦の糸、横の糸、そして斜めの糸とが織りなす絵模様は果たしてどのような世界なのでしょうか。五三会も皆様が織り上げてゆかれる絵模様に役立つ糸でありたいものです。

皆様にとって必要ある糸になる為には、皆様のご協力が無ければ成り立たないことも又自明の理なのです。この綾取りを皆様にしていただいて一本の糸を見い出していただきたいものです。

同窓会を運営して行く上で、会誌の発行、同窓生名簿の作成は、必要不可欠なことでしょう。この充実は今後とも考えて行かなければならないことです。それにプラスして、私共は、「五三会コンペ」なるものを企画し、過去10回実行してまいりました。昨年は「10回記念コンペ」と銘打って、審査員には、日本建築家協会新人賞を高松伸氏と並んで受賞された伊東豊雄氏をお迎えして、多数な応募作品にも恵まれ盛大ななかにも充実した素晴らしいコンペが実現しました。大輪の花火を打ち上げるには、それなりの準備がいるものです。担当された方達には本当にご苦労さまでした。又ご支援下さった皆様には、誌面にて恐縮でございますが深くお礼申し上げます。

盛大な花火の後には、その余韻と共にある種の虚脱感が残ります。それを打ち破るには、大層な努力が要るものです。むしろ間を置いた方が良いのではという考え方もありましょう。役員会でも、一時はその方向で意見がまとまったのですが、若い幾人かの人達は、その様なことを考える以上に、続けて行きたいという気持ちを訴えてくれました。素晴らしいことではないでしょうか、この声を無駄にすることなく、たとえそれが小さな一輪の花であったとしても咲かせていきたい所存でおります。言うまでもなく、皆様のご協力無くしては、実るものではありません。根を大地に張ろうとする大事な時です。どうか温かい目で育くんでいただきますようお願い致します。

「五　三　会」

近畿支部 会計　田中康夫（48年卒）

「五三会」近畿支部も設立して２年間が過ぎ会員名簿の整理も進み近畿で約200名近く、確認されております。

より一層「五三会」を盛り上げるため近畿支部では活発に活動して行きたいと思っております。

近畿支部総会が昭和59年11月25日大阪北区のパーマリィ・インホテルで開催されました。近畿支部会員33名、本部より中塚会長、母校より佐藤重夫主任教授・天満助教授・佐藤立美助教授の参加を頂き盛大に行なわれました。

総会は平口会長の挨拶に始まり、活動方針・会計報告・役員選出を行ない、アジア大会広島に係わる仕事の報告や大学院生として活躍している人達の紹介が行なわれました。懇親会ではお酒と食事で和気あいあいに行なわれ、ブックセンターや大学寮・五三会コンペ等のスライドが紹介され、先生方が歌を披露されるなど、同窓生の親睦を深め閉幕致しました事を報告します。

出席者名簿

44年卒　伊藤　公
45年　西矢正一
46年　古岡憲夫
47年　小田中徹・岡野義延・木原多佳雄・河野徹士・鈴木邦芳・田中通央・通谷隆志
48年　田中康夫・平口祐二・藤田直幸
49年　坂根　満・戸田富久
50年　小林博之
51年　神田　徹
52年　河内浩志・竹元茂好
53年　澄田則夫・田中壮一
54年　浅沼　智・森田誠二・山本和憲
55年　金田義明
56年　市川直人・入船百弘・大森正夫
57年　下岡秀樹（東京）
58年　小林徹也・崎村清人
59年　青木　滋・玉置卓男・松尾兆郎

転居者　近畿→広島

48年卒　中村正明　岩国市元町３丁目6-20
Tel　0827-24-2756
48年　弓山　隆　三原へ？
54年　丹　信一　呉市和庄１丁目3-3

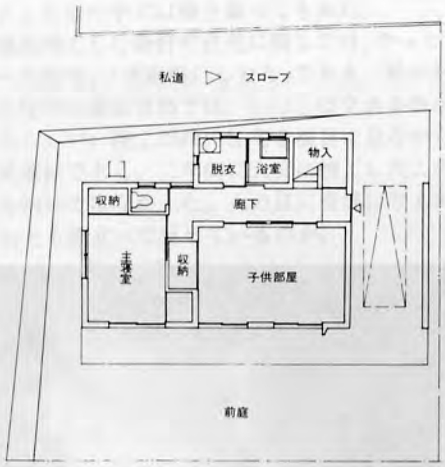
道路と敷地の高低差を利用

渡辺武彦

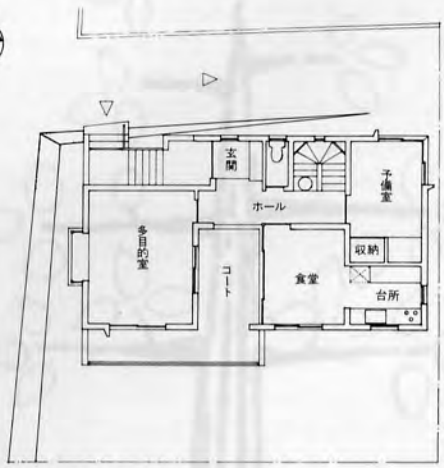
南面に流れる佐方川は、昔、大雨の度に、洪水をくりかえして年々堤防が高くなり、現在、敷地との高低差のある形状となっている。堤防より斜めに下りる道路と、道路から住宅に下りる私道、この道路面下の敷地に建つ住宅は、両者とも学校の教諭をされている若い夫妻の住まいである。北面に位置する両親の住居に同居されていたが、2人の子供の成長とともに無理となり、同一敷地の南西面に建築された。特に両親の住宅に日照の影響を与えないようにとの要望も有り南北に長く配置されている。私道と敷地の高低差を利用し、高い位置よりアプローチし、2階に導入される。2階は、パブリックな、スペースを主とした部屋の配置とし、建物の北面側部屋への日照と通風を、取入れたいことと、内部と外部のつなぎの意図も有り、中央に小さなコートを、配した。当初は、ガラスの屋根をつけ、サンルームに利用したいとの夫妻の意向もあったが、今日迄生活されて、現在のままが、とても快適とのこと。1階は、内部階段を下り、プライベートな部屋が配置されている。廊下より車庫に通じ、両親の住いへの、つなぎも考慮したが、非常に利用頻度が、高いようである。外部から内部へ、内部から外部への動線は、設計意図に合った無理のない動きを、示していた。夫妻が設計者の設計意図を理解され、充分に、使いこなされている住宅のひとつである。

■建 物 名　落合邸
所 在 地　広島県佐伯郡廿日市町佐方
家族構成　夫婦＋子供２人(男・女)
■設　　計　渡辺武彦建築設計室
代表者　渡辺武彦
担当者　(意匠)渡辺武彦
渡辺ともえ
(構造)ＫＫユニ建築設計連合
伊佐之男
■施　　工　㈲楠森建設
■面　　積　敷地面積　176.66㎡(53.44坪)
建築面積　80.21㎡(24.26坪)
延床面積　138.14㎡(41.78坪)
１階 73.93㎡(内車庫18.22㎡)
２階 64.21㎡
構造規模　鉄筋コンクリート壁式構造 2階建
設計期間　1980年12月～1981年３月
工事期間　1981年４月～1981年９月
■主な外部仕上げ
屋根ーコンクリートコテ押え、
スーパーテンション300露出防水
壁 ーコンクリートパネル打放し、
ケミストップ吹付
建具ーアルミサッシュ

■主な内部仕上げ
天井ープラスターボード㋐９㎜ クロス貼り
壁 ープラスターボード㋐９㎜ クロス貼り
１部モルタル(ソフコートサンド混入)
金ゴテ下地クロス貼り
床ー楢乱尺貼り㋐15
■撮　　影　カルダンプロ(岡田俊夫)
■渡辺武彦建築設計室
1978年設立／所員２名／主な作品 田川邸・石津邸・中野邸・迫田邸ほか
■渡辺武彦プロフィール
1943年　福岡県に生まれる／1969年　広島工業大学建築学科卒業／1969年　丸一建築設計事務所入所／1971年　友人３人と造設計集団Ａ・Ａ設計室設立／1978年　独立、現在に至る。



1階平面図



2階平面図

作　品

山中　勝行

敷地は「学園都市」をめざす、東広島市のほぼ中心部に位置している。このあたりは、古くからの造り酒屋が建ち並ぶ町でもある。

平面・断面・立面計画

敷地には、庭木・果樹等の木々が立ち並び、これらの木々をいかに建物と調和させるかということを心掛け、建物を北側に配置した。

2層分の吹抜けを持つ広間を中心に、全体的にこまごまとした技巧をこらすことを避け、出来る限り単純化し、自律性のあるおちついた空間の演出を基調とした。

急勾配の屋根と450×900の外壁目地のリズムが、この建物をより一層印象づけている。

作　品

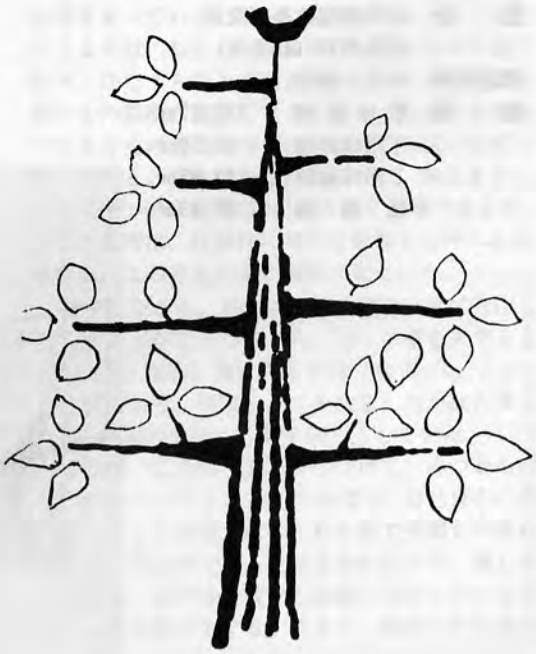
村上徹建築設計事務所　村上　徹

設計事務所らしきものを構えてからもう10年近くになる。その間、住宅を主に30近くの建物を手がけてきた。そのほとんどは鉄筋コンクリート造の住宅であり、その規模も30m²程度から260m²とバラエティーに富んでいる。増築もあれば改築もあり、団地集会所や農協もあれば集合ビル的建築もやった。とにかく作品らしきものを広島を中心に数多く存在させた事は確かなようである。

その間、使用した仕上げ材料はコンクリート打放し・白色ペンキ・金属板・石等でモノクロ的である。その都度形態が変わり、仕上げを変え、ディティールを変えても、ただ一貫しているのは「倉庫みたいですね。」「何が建ったんですか？」との近隣の人、通りがかりの人の挨拶である。」中には「納骨堂みたいですね。」「隣りの家の車庫？倉庫？」とまで言われる始末である。「なあにお前の住んでいる家は同じ箱でも、ガラクタ箱じゃないか！」と心の中では開き直ってもみた。

最近竣工した数軒の住宅に関しては、やっと「変わった住宅」「美術館にしたら」である。私が設計した住宅の前面道路では、しばしば交通事故が起こるらしい。竣工間際の住宅を横目に見ながらの脇見運転である。二年前に大野に竣工したこの住宅も例外ではなかった。人の目に奇異に写るのか、それとも際立って見えているのか。

数年前に逢ったある建築家が「倉庫に見えるのはある意味では良い方向だ。倉庫の形は建築の基本型の一つだから。」と言われた事が思い出される。現在、私は多種多様な構造体・材料・色彩・形態等、それらの組み合わせに非常に興味をもっている。自分なりにそれらを使いこなし、混在させての建築ができるような気がしてきた。今までの簡潔的な空間をどこから打ち崩しガラクタ化するか、それでいかに倉庫を設計し続けるか、これが今後の課題である。



作　　品

有馬環境建築研究所　有馬秀宣

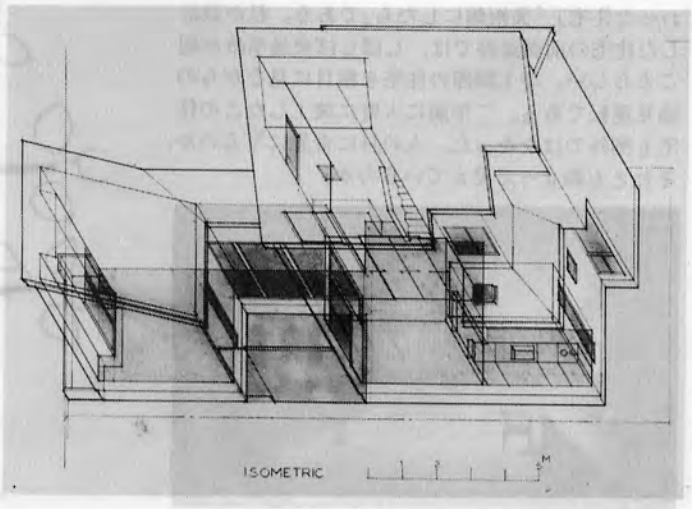
設計主旨

短冊型40坪の敷地、建ペイ率50%、西側のみ瀬戸内海の眺望が期待出来る。などの条件により、可能な限り敷地一杯に建物を配置し、ガレージと中庭をえぐり取った形態となっている。

狭小な敷地の余白を有効に使うために、庭をあえて中庭にしたことは、本来戸外の空間である庭が室内化されており成功したと言える。

この住宅において、ガレージは道と住居の接点であり、中庭は部屋と部屋の接点である。つまり、戸外の空間を媒介とし、内部空間をより活性化させようとする試みである。

建築名	矢野の家	
所在地	広島市安芸区矢野町	
家族構成	夫婦＋子供２人	
設　計	有馬環境建築研究所 有馬秀宣（48年卒）	
構造規模	木造２階建	
面　積	敷地面積	132.27m²
	１階床面積	63.50m²
	２階床面積	33.95m²
	延面積	97.45m²



主（あるじ）と住（すみか）。

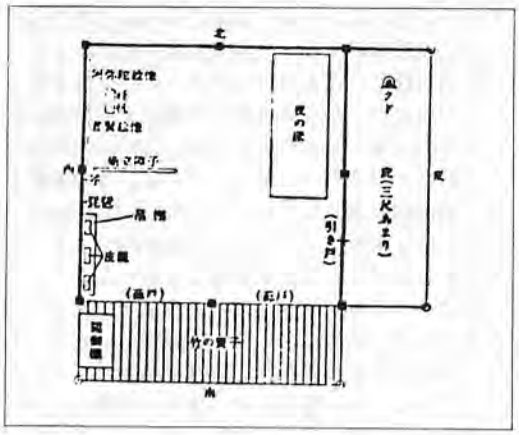
――粗描――

京都大学 大学院博士後期課程　河内浩志

21世紀の建築・様式を問う評論やコンペ等が雑誌の紙面に取り上げられ語られる時、本来この問いは、建築のあり得べき像(Pas Bild)を問うているのではなかろうか。建築・様式や生活・環境の断片化が、その回復されるべき反省点として叫ばれているにもかかわらず、建築の生きられる空間は、ますます記号化され、身体から遠ざけられている。言い換えれば、周囲の環境にすまい生きる人と建築の在り方(形態も含めて)、つまり〈あるじ〉と〈すみか〉との分裂・分断が、増幅されているとも考えられる。それと連関させて、ここでは文学の領域ではあるが、鴨長明の世界を一瞥してみることにしよう。

玉敷の都のうちに、棟をならべ、いらかをあらそへる、たかき、いやしき、人の住ひは、世々をへて、尽きせぬものなれど、これをまことかとたづぬれば、むかしありし家はまれなり。或は去年焼けて、今年つくれり。或は大家ほろびて、小家となる。住む人もこれにおなじ。ところも変らず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかひとりふたりなり。朝に死に、夕に生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ、死ぬる、人、いづかたより来たりて、いづかたへか去る。また、知らず、仮のやどり、誰がためにか心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。そのあるじとすみかと、無常をあらそうさま、いはば朝顔の露にことならず。或は露おちて、花のこれり。のこるといえども、朝日に枯れぬ。或は花しぼみて、露なほ消えず。きえずといへども、夕を待つことなし。

「玉敷の都のうちに…」からつづく上の文章は、正に空間論といえよう。この冒頭の文だけでも、〈すまい〉に関わる表現が多く目につく。「家」「大家」をはじめ、「住ひ」「やどり」「すみか」があり、「ところ」があり、空間を予描した「住む人」「あるじ」がある。大きな世界も〈すみか〉だし、逆に方丈も世界として考えられる。長明の〈すみか〉というのは、In-der-Welt（世界のなか）の一つの家。それが、「ゆく河の流れ」にうかぶあぶくのように、消えてはまた生まれてくるような、そういう無常転変の記述が注目される。そして、ここでは居住空間において、無常を見るということが、明確に示されている。無常という時間的課題を空間的モチーフとして受けとめているところが、『方丈記』の根幹になっているのであろう。



さて、長明の閑居した京都の日野の〈すみか〉とは、いか様であったのか。「広さはわずか方丈、たかさは七尺がうちなり」、方丈は一丈四方、一丈は十尺で約3.3m、七尺は2.13m。つまり、広さはだいたい四畳半程度、高さ２ｍぐらいの住居ということになる。材木のつぎめは、釘で打ちつけることをせずに、かけがねでとめただけの非常に簡素な庵である。彼は、ここに心をこめて我が生活の場所を構築し、信仰上の、また趣味上の小道具を書き並べている。淋しい世捨て人のイメージというよりは、むしろ生活を楽しんでいるかの様であり、ひたすらなる求道者というよりも、風流有閑の士の隠棲の庵のごとくである。仮設的建築物である方丈の庵は、今や住みなれて永遠の故郷となっている。方丈の草庵においては、形式を介しての場所への永遠性は、記述として希薄であるが、ここで長明は、仮設性に対する故郷とも呼べる永遠性を、この方丈の庵に同時に見ていた。

しかしながら、長明は、この閑居生活に安住し安らぐことができなかった。「今、草庵を愛するもとがとす。閑寂に著するもさはりなるべし」、という心境に至る。閑居し全てを捨象したが故の楽しみは、現世的風雅と一脈を同じくしていた。「しづかなる暁、ことわりを思ひつづけて、みづからの心に問ひていはく」、自らの反省が、自己自心の内的闘争として展開される。形を捨て世間との交わりは切ったはずであったにもかかわらず、楽しみの風雅は、心の中で現世と直接に交信しているという自己矛盾が生ずる。つまり、閑居した生活の

中で、人間的な努力や思惟が、有限の世界における事柄の展開を楽しんでいたのである。その楽しみが苦しみになり、希望が絶望になり、虚無が自心に現われたのかもしれない。「そのとき、心更に答ふる事なし。只、かたわらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ。」、と絶句する所で終わる。内心の追求の果てに突き当たった自己矛盾に対する、もはや動きのとれなくなった長明の沈黙による告白である。この自己矛盾としての虚無が、自らの反省を契機に矛盾的自己同一へと心を騒がせるのであるが、『方丈記』は無限を予感させ得るのみに留まっている。その無限とは、絶対的に静止している〈大地〉E. Husserl (= die Erde)に相応しており、それは同時に、形あるものをしっかりと支える基盤でもあった。

欠乏しているが故に希求してやまず、希求するが充されない時代において、鴨長明は、定住としての形の安息を否定した。それ故に隠棲する。しかし結果として、彼は、その仮りの草庵の生活にも安住を見い出して自己矛盾に陥ってしまった。『方丈記』の最後では、彼は沈黙をもって答えるのみであるが、そこでの仮設的な方丈の草庵は、ただに絶対的大地性への予描を含み、また真に大地を開くことの手掛かりになり得るのみである。

主と住の問いは、未解決のまま先に持ち越されてしまった。少なくともここでは、〈すみか〉は、住居の機能や形の表現に停まることなく、さらに形や機能を越えた〈あるじ〉の生き方にまで連関していることが、示唆されているにすぎない。

ゆく河の流は絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人とすみかと、またかくのごとし。

広島市役所支部紹介

中区役所建築課　山本富雄

当支部の近況ならび活動状況を簡単に紹介します。

会員数は、現在30名程ですが、近年、入会者が鈍化の傾向にあります。会の若返りのためにも、今後に大いに期待したいところです。

次に職域としては、営繕課、住宅建設課、都市計画課を初めとして、建築関係の各課には、大抵一人や二人は居ますので、何らかの形で皆さんのお役に立てればと願っています。

会員相互の親睦としては、４月の異動直後に行なう親睦会と、暮れの忘年会の二大行事がそのすべてです。特に、前者では、宮島を望む対岸で一泊どんちゃん騒ぎしますので、これを楽しみにしている会員も多いようです。しかし、各自都合等があって、全員参加とまで行かないのが残念です。

今後の課題としては、これらのことを考え含めて、さらに会活性化のために、ゴルフコンペや勉強会など多彩な行事を企画していきたいと考えています。

ところで、皆さんの職場ではいかがでしょうか。

職場の近況

荒谷　博（46年卒）

同窓の皆様には、それぞれの職場に於いて（自営を含む）御活躍のことと、ご推察申し上げます。

私の職場は、県庁ですが、近年の経済成長の伸び悩みと同様に、県勢の活力も停滞気味です。

新年の御礼会で知事は、「県勢活性化推進協議会からの提案の一つとして〝活力ある行政〟を望むと提言されており、まさに受身の行政から攻めの行政へと発想転換する必要がある」と職員に活力を求めています。

建築職に於いては、ここ数年、新規募集もなく若々しい、新入職員の活力を見ることもなく、若き血を求めてやまないドラキュラの心境である。こうした中にあって、工大OBは、現在18名でそれぞれの所属に於いて、中堅として県政の推進役を担うべく、対話と調和の精神で各自、個性を創りあげるべく仕事に励んでいる毎日です。

それぞれの所属は、次の通りですので、皆様のお考えや、苦言を是非、私どもにお聴かせ頂きたいと思います。

五三会のために

出口　武彦

月日のたつものは早いもので、私が本学の建築科へ入学して4回目の春がやってこようとしています。ただ、莫然とした気持ちで建築科を選択し、ただ、莫然と過ごしてきた今、自分なりに〝建築とは何か〟という原点を振り返りながら一歩一歩前進していきたいと思います。

建築に限らず世に、人間に関わりをもつ事項は数多くあります。その中で、衣・食・住の住むという概念は、人間が人間であるための基本ではないでしょうか。たまたま建築を通じて人間を学ぶという機会に出会った私たちは、学生時代という、かけがえのない若い情熱を燃やせるこの時を、大いに、悩み、喜び、悲しみ、恋をし…etc.建築以間の人として、より人間らしい心をもてるようになって、はじめて建築を学ぶためのスタートラインに並べるのではないでしょうか。以上のようなことを、今後の学生生活の糧として行きたいと思います。

巻　頭　言

垣中　祐二

感激あれ若人よ
感激なき人生は、空虚なり
汝、我らが前に高く高く理想を掲げよ
さすれば道は淡々として
汝、我らが前に開けん
ただ歩めば至る

―巻頭言―

この言葉が私の大学生活における心の支えであり、生き方の目標となりました。

現在学生の無気力さが大きな問題になっています。私も、同じ学生としてその無気力さに憤りを感じる半面、もしかして私もそのひとりではなかったかと、今になって痛感し反省しております。

人生における大学での4年間などとるに足らない毎日なのかもしれません．しかし、その4年間の1日1日を昨日より今日、今日より明日という気持で過ごせば、大学も又、意味深いところではないでしょうか!?

確かに大学とは勉学に励むところではありますが、それだけではないはずです。自らが何かを見いだし、体験し、体得し、自らの器を大きくしていくプロセスを自らの目で見極めていける人生において唯一のステージではないでしょうか。

私はこれから、社会という新たなステージに立つわけですが今一度巻頭言の意を想い、自らの道を方向づけようと思います。

第10回五三会記念コンペ入選発表

第10回五三会コンペは第10回ということもあり、記念コンペとし賞金総額30万、審査員を現在設計で御活躍の伊東豊雄先生にお願いいたし、課題「イメージの家」をもっておこなわれ、昭和59年9月30日をもって締切りました。

応募作品数は学内から12点学外から14点、合計26点と言う多数の応募がありました。

審査は10月9日広島工業大学建築学科にて、審査員伊東豊雄先生による厳正な審査の結果次記のとおり、入選案が決定いたしました。又、表彰式は11月3日広島工業大学大学祭にて、多数の出席者のもとにおこなわれました。講評の後、活発な意見交歓ができたことを嬉しく思います。

今回伊東豊雄先生を御招きするにあたり、五三会の方々（協賛事務所、氏名、リストは下記のとおり）の御協力、及びに御援助をいただきましたことを五三会コンペ実行委員一同厚く御礼申しあげます。

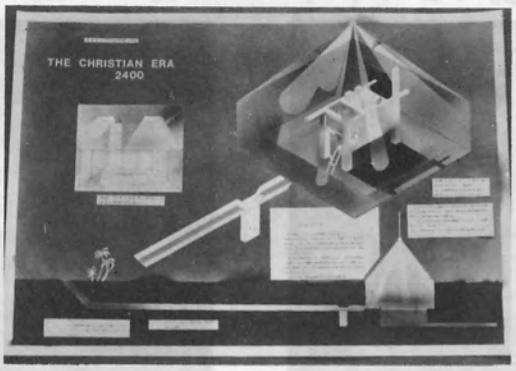
又、伊東豊雄先生につきましては、課題説明、スライド会、審査、表彰式と御多忙な中を何回も広島に来ていただき、なにかと御協力いただいたことにたいへん厚く御礼申し上げると共にこれからのより一層の御活躍を御希望いたします。

第11回五三会コンペは、事情により少々規模を縮少しますが、これまで以上課題、審査員及び審査の方法について検討を加え、益々魅力あるコンペにすべく努力致しますので次回も皆様の多数の応募を期待いたしております。

（第10回五三会コンペ実行委員長　落合木堂）

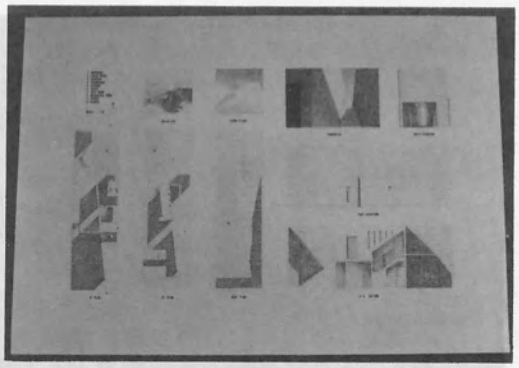
第10回五三会コンペ協賛事務所

青木　能典	㈱青木設計事務所
有馬　秀宣	有馬環境建築研究所
村上　　徹	村上徹建築設計事務所
北野　俊二	北野俊二建築設計事務所
山中　勝行	山中建築設計事務所
横山　健次	横山建築研究所
渡辺　武彦	渡辺武彦建築設計室
金沢　克彦	中央インテリアサービス株式会社
三上　明夫	KAZI建築設計工房
中塚　晴夫	造設計集団AA設計室
高岡　昌弘	高岡昌弘建築綜合研究所
水野　良信	水野良信建築設計事務所
松本　徹郎	中国アサヒ建工株式会社
保井　英二	保井建築設計事務所
小西　芳雄	コニシ建築設計事務所
二宮　恒治	二宮設計室
高橋　啓二	高橋啓二建築研究所
中村美津子	五光建築構造事務所
金井　三郎	カナイ建築構造事務所
田中　康夫	田中康夫建築設計事務所
石田　敏明	石田敏明建築設計事務所
	川原建築設計事務所
	三谷設計室
三吉　幸夫	㈲アトリエ・SAM建築設計室
川田　　潤	潤建築設計事務所
杉谷　康男	杉谷康男建築設計事務所



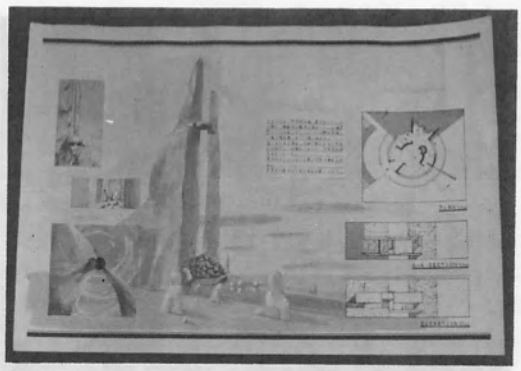
最優秀

大元　尚弘（福山大学）



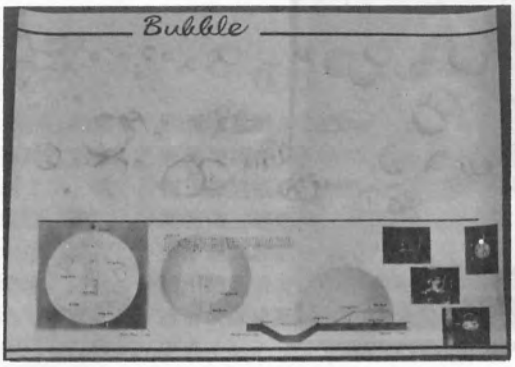
優　秀

篠部　裕（呉高専卒）



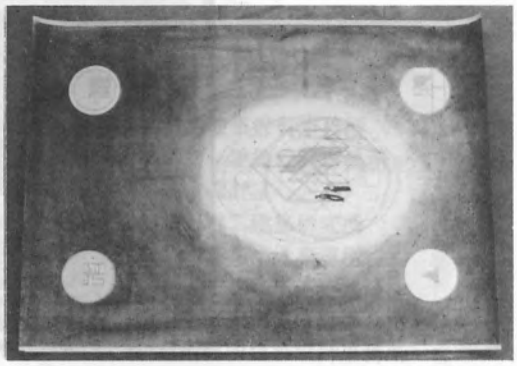
優　秀

大西　賢宣（福山大学）



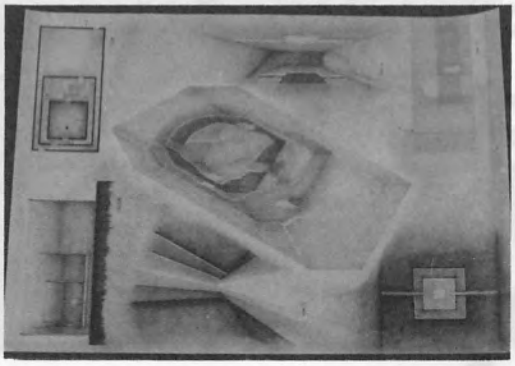
優　秀

豊田　邦彦（福山大学）



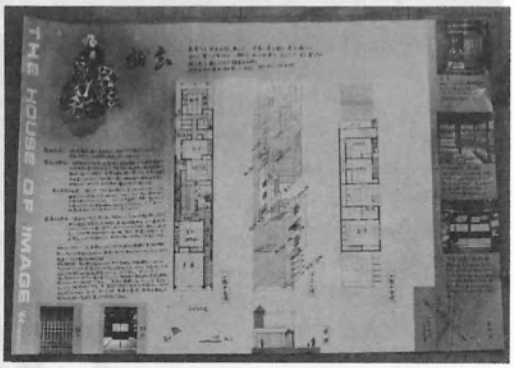
優　秀

半田　健二（広島工業大学53年卒）



優　秀

垣中　祐二（広島工業大学）



優　秀

小島　修一郎（広島工業大学58年卒）

第10回五三会コンペティション総評

伊東豊雄

今回の「イメージの家」というテーマは、考え方によっては難解とも言えるし、またきわめて容易なテーマとも言えよう。何故ならば、あらゆる建築の根源に潜在している家の原イメージを探り出そうとする試みという点ではそれはコンセプチュアルな課題であるが、他方建築家という職業人としてではなくともあらゆる人々が抱いている家のイメージをできるだけ素直に描けばよいという点では小学生の描く絵のように平明なものでもよいからである。

応募26案すべてが私にとってはなかなかに興味深いものであった。それはこのようなテーマのコンペティションの場合、建築的処理の巧みさは大した評価基準とはならないはずであり、むしろ建築的束縛にとらわれずに、どれ程自由に自己の家への想像力を引き出せるかだけが問われるはずだからである。したがって私が選んだ入選7点の作品は他の作品と比較した時に、プランニングや建築的知識などの点では稚拙に感じられても、とらわれずに自分のイメージを生き生きと描いたという点で秀れていると感じられたものである。

最優秀作大元尚弘さんの「CHRISTIAN ERA 2400」という作品は長い地下道の奥に存在するピラミッドの内部が突如光り輝き、未だ溶融状態にある建築があらわれる様子を描いており、応募全作品中最も論理的にイメージの家を位置づけている。即ち、長く暗い洞窟の彼方のピラミッド、その内部で古代エジプトを連想させるノスタルジックなハープの香りに包まれた眠り、眠りのなかに聞こえてくる波の音といった具合に、このピラミッドへの到達は胎内回帰を意味しており、これは建築の典型的な原イメージの魅力的な表現である。またこの胎内には発生過程の架構が存在し、やがて新しい新築へと生長していくという暗示も適確である。しかしこのイメージの適確さに比較し、そのヴィジュアライゼーションとしてのドウローイングはやや魅力に欠けている。特に方形の木造住宅内部のような印象を与えるピラミッド内部やベッドルームなど、胎内の奥深さ、秘めやかさに乏しく視覚的表現のトレーニングが望まれる。

篠部裕さんの作品は平面を持った建築として整理した案のなかでは最もよくまとまっている。整然として端正なコンクリートの壁面による構成のなかにやや控え目だが、自然へのロマンティックなイメージを表現しようとしており、特に逆パースをつけながら宙に消えてゆく階段の部分のイメージは美しい。しかし開口部のパターン、平面を斜めに横切る壁面など既存の建築に自己のイメージを閉じ込められている点が気にかかる。技巧的になるのではなく、自分の内側により視野を向け、その最も確かなる部分をストレートに描いて欲しいように感じられた。

大西賢宣さんの作品は篠部案とは対照的に、建築としては自分のイメージを描き切れていない弱さを感じるが、曖昧模湖とした液体のようなイメージを次第に凝固させて何とか建築化しようとしている苦労が十分に察せられる。「大地に根をおろし安定した部分と空間をさまよう不安定な部分」という二つの対立項の間にイメージの家があるという発想も興味深いし、宇宙に向かって垂直に突き立つ山とそこに円盤状に浮かぶ家、その足下に拡がるシュールレアリズム的世界などの詩的イメージもユニークである。これらのイメージが建築化の過程でもう一歩踏み込んで統一されていればと惜しまれる。

豊田邦彦さんと、半田健二さんの作品は、いずれも宇宙に拡がっていく球体ードームとして家のイメージを把えるという点で共通している。宙に浮かぶドームはバックミンスター・フラーのプロジェクトに代表されるように洞窟と対照的な世界であるが、これも家の原イメージのひとつの典型を示している。豊田案はこれを無限に拡がるBubble(気泡)としてイメージしており、その連結、拡散のなかに家のさまざまな状態を具体的に表現しようと試みている。その発想は美しいが、建築的表現にはギャップがある。逆に半田案はより抽象的な球体を家と考え、その内部の入れ子になったキューブやエントランスの三角形のパターンなどと幾何学的な対立を示している。抽象的な表現方法や建築的構成に巧みさが示され、日常の設計における建築的習熟の度合は察せられるが、内から湧き上げてくるイメージの強さが感じられない。建築設計という作業では常にイメージを対象化し、客観化することを要求されるのはいたし方ないとしても、このようにドームを外側から眺めるのではなく、内側から膨れ上がっていく空間として把えようとする自己の衝動を大切にして欲しいと感じた。

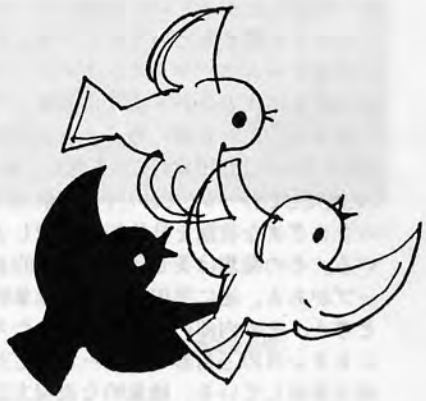
垣中祐二さんの作品は切妻の家型の内部に三重の入れ子の空間がつくられており、仏教的な宇宙表現のひとつの典型的な方法に拠っている。この入れ子の構成が屋根のスカイライト、正方形を中心に据えたスリット状の開口部、アーチ状のエントランスの形態を通じて鮮明に表現されている。

胎内のように柔かな空間を描こうとした表現方法に独特の魅力があるが、切妻の家型や開口の形態に独自性が乏しく全体の印象を弱めている。

小島修一郎さんの作品は但馬街道の長屋を具体的に選び、その修復プロジェクトの如き形をとってイメージの家を表現している。この長屋のなかに京都や秋田の民家の部分を挿入し、自己の記憶或いは嗜好の内にある空間の集積からイメージを呼び醒そうとするアプローチには他の案に見られないオリジナリティが感じられる。特に通り庭、土縁、廻り縁など結界の空間を結びながらリニアーな空間を構成し、その奥にイメージの家を見ようとしている点に魅力を感ずるが、それらの構成は過去へと遡るだけであり、新しいものへと置き変わる起点を見出し得ていないのではなかろうか。

この他にも、金子浩二さん、石川雅英さんの案など建築的構成に於いてよくまとまった作品もあったが、冒頭に述べたような理由から入選とするにはいま一歩アピールする力に欠けた。

五三会のコンペティションは今年で第10回を迎え、応募作品数も増加しているようであるが、このような企画が地方で地道に着実な成果を上げていることはきわめて重要である。実行委員諸氏の御協力に対し深く感謝すると同じに、今後このコンペティションが益々発展されることを心から期待する。



第11回 五三会コンペ作品募集

五三会コンペも今回で第11回を迎える事が出来ました。これも皆様方の御支援の賜物と思っております。

10年をひとくぎりとするならば、第11回は再スタートの年と申せましょう。今回はその再スタートに相応しく、広島工業大学建築学科主任教授の佐藤重夫先生に審査をお願いしております。多数の応募をお願い致します。

＜課題＞　現代の方丈庵

＜主旨＞

物質的豊かさの中で飽食状態にある現代生活に対するアンチテーゼとして、「現代の方丈庵」と題する小住宅を提案していただきたい。いうまでもなく、ここで言う「方丈庵」とは鴨長明の作による『方丈記』に登場する方丈の庵を想い描いている。

『ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくのごとし』と長明はその冒頭において、この世の無常を説く。それは、物に囲まれ、物に執着している我々の現代生活に対する時代を超えたアンチテーゼで在り得よう。

しかし、我々、建築を志ざす者は、ただ無常感の中でニヒリズムに浸っている訳にはゆかない。又、長明の如く、世を捨てて山中に隠棲する訳にもゆかない。従って、「現代の方丈庵」は、具体的現実の中にあって、無常を無常として肯定しつつ、乗り越える案である事を望んでいる。

＜条件＞

1．具体的敷地を設定する事。設定は各自の自由とする。ただし周辺状況を示す写真又はスケッチ等を図面内に入れる事。

2．構法及び材料は自由であるが、設定した土地、所にふさわしい構法及び材料を用いる事が望ましい。

3．最低限住めるだけの実用性を考慮する事。

＜所用図面＞

A_1 1枚に配置図、平面図、立面図、断面図、模型写真、パース、スケッチ等、設計意図を表現するために必要な図面を各自選択して描くこと。ただし各図には主要寸法を記入すること。

＜表現＞

自由とする。ただし未発表のものに限る。

＜応募記載事項＞

作品の裏面に、応募者の住所、氏名、電話番号、学校名（会社名）を記入する事。

＜応募締切＞

昭和60年9月30日

＜提出先＞

〒731-51　広島市佐伯区五日市町三宅

広島工業大学建築学科事務室

＜応募資格＞

広島県内所在大学、工専の建築学科学生及びその卒業生。

＜入選賞金＞

総額10万円　応募者に通知するとともに、大学祭（11月3日）にて発表、表彰、展示を行なう。

＜その他＞

作品の返却はしない。

質疑応答なし。

五三会活動報告

幹事長　森田洋生

本年度の卒業生で、五三会は15期のメンバーを迎えることとなりました。

建設業界の景気は次第に上向いているものの、今だ、きびしいものを感じます。

各職場で社会的にも重要なポストに立つ方もおられ、会員の方々は忙しい日々を送っておられることと思います。今まさに五三会会員が一丸となって、縦、横の連携を保ちより一層飛躍していくことが大切なように思われます。

さて、本年度の活動としては、次の様な行事を行なってまいりました。以下ここに、御報告申し上げます。

報告内容

昭和59年度活動報告

1. 会報誌「五三会」第12号発刊
2. 第10回記念コンペの実施
3. 在学生に対する援助
4. 会員住所カードの作成
5. 本部組織の強化
6. 会員増加運動

同窓生が増えてくるにしたがって、各幹事も多忙となってまいっており、会員の皆様方の尚一層の深い御理解と御協力をお願いしたいと思います。

〔昭和58年度 収支決算報告〕

◆ 収入の部

繰越金	1,097,145
新会員会費	620,000
会員会費	240,000
広告料	700,000
雑収入	30,055
合計	2,687,200

◆ 支出の部

印刷費	360,000
郵送費	387,600
会議費	134,844
活動費	35,000
総会負担金	0
コンペ費	260,000
在学生援助費	80,000
支部発足援助費	50,000
バイト費	12,400
消耗品・雑費	0
学術文化費	20,000
予備費	0
繰越金	1,347,356
合計	2,687,200

〔昭和59年度 収支予算〕

◆収入の部

科目	小科目	金額	摘要
会費収入		1,300,000	
	新会員会費	1,000,000	
	会員会費	300,000	
活動収入		1,340,000	
	総会パーティ券	385,000	
	広告料	955,000	
雑収入		3,644	
	利子収入	500	
	寄付収入	1	
	雑収入	3,143	
積立金取崩収入		0	
	積立金取崩収入	0	
繰越金		1,347,356	
	繰越金	1,347,356	
合計		3,991,000	

◆支出の部

科目	小科目	金額	摘要
管理費		931,000	
	総会費	485,000	
	会議費	222,000	37×1000×6
	人件費	99,000	220×450
	消耗品費	30,000	7×3500+5500
	備品購入費	50,000	
	印刷費	20,000	
	通信費	15,000	
	雑費	10,000	
活動費		1,460,000	
	会報発刊費	980,000	
	コンペ費	360,000	
	在学生援助費	50,000	
	会勢費	30,000	
	学術文化費	40,000	
予備費		100,000	
	予備費	100,000	
積立金		1,500,000	
	積立金	1,500,000	
繰越金		0	
	繰越金	0	
合計		3,991,000	

広島工業大学建築学科同窓会
「五三会」 会則

第一章　総　則

第 1 条　本会は広島工業大学建築学科同窓会「五三会」と称する。

第 2 条　本会は本部を広島工業大学建築学科内に置く。但し、総会で必要と認めた場合に支部を置く事を得る。

第 3 条　本会は会員相互の交誼を厚くし、かつ母校建築学科の発展に貢献することを目的とする。

第 4 条　本会は前述の目的達成の為に下記の事業を行なう。

1　集　会
1　会員相互の連絡並びに共助に関すること
1　会誌及び会員名簿の発刊
1　母校建築学科に対する精神的、物質的援助
1　その他本会の目的達成に必要な事

第二章　会　員

第 5 条　本会は下記の者を以って組織する。

1　会　員　広島工業大学建築学科卒業生
1　学生会員　広島工業大学建築学科在学生
1　客　員　母校職員及び旧職員
1　名誉会員　本会の発展に貢献し、名誉会員としてふさわしいと総会で認められた者。

第三章　役　員

第 6 条　本会は下記の役員を置く。

1　名誉会長　置くことができる

1	会　長	1　名	1	副会長	2　名
1	会　計	2　名	1	会計監査	2　名
1	幹事長	1　名	1	幹　事	若干名
1	評議員	各卒業年度に若干名	1	書　記	2　名

第 7 条　本会の役員は次の方法で決める。

1　名誉会長は総会をもって推す
1　会長・副会長・幹事・会計・会計監査・評議員は総会で正会員の中から選ぶ
1　幹事長は幹事の中から互選する
1　幹事は総会の議決により正会員の中から委嘱する

第 8 条　各役員はそれぞれ次の任務をもつ。

1　会　　長　　本会を代表し会務を統べる
1　副 会 長　　会長を助け支障がある時は代理する
1　会　　計　　会計事務に当る
1　会計監査　　会計を監査する
1　幹 事 長　　会務を主掌する
1　幹　　事　　会務を処する
1　評 議 員　　会務を評議する

第 9 条　役員の任期は一カ年とし再任をさまたげない。但し欠員は役員会にはかり補充しこれによって就任した者の任期は前任者の残りの期間とする。

第四章　顧　　問

第 10 条　この会に顧問若干名をおく。

1　顧問は総会の議決により適任者を委嘱する
1　顧問は会の諮問に応じる

第五章　会　　議

第 11 条　会議を分けて定期総会、臨時総会及び役員会とする。

第 12 条　総会は最高の議決機関で毎年１回開く。臨時総会は役員会が必要と認めた時会長が招集する。

第 13 条　総会は次のことを決める。

1　会則の変更と改正　　1　決算及び予算
1　役員の改選　　1　その他重要な事

第 14 条　役員会は会長が必要と認めた時招集し、次のことを決める。

1　総会に附議する原案　　1　この会の運営に関する諸事項
1　その他緊急事項の協議

第 15 条　会議の議決は会員の参加者の過半数をもって決定し、賛否同数の時は議長がこれを決定する。

第六章　会　　計

第 16 条　この会の経費は会費、寄付金及びその他の収入をあてる。

1　会員は入会金と終身会費として、入会時10,000円を納入しなければならない。
1　学生会員は在学期間の会費として2,000円を納入しなければならない。

第 17 条　この会の会計年度は４月１日に始まり、翌年３月31日に終る。

付　　則

終身会費については、昭和58年度から施行する。

母校だより

五三会の皆さんには、秒進分歩のハイテク時代を踏えて、ますますご活躍のことと存じます。

さて、鶴学園は昭和61年に創立30周年を迎えることになりました。また、同窓会も同じ61年で設立20周年、いわゆる成人の年にあたり、卒業生も今年の３月で15,000人余を数えるに至りました。

ところで、母校の広島工業大学は、この記念すべき年にあたり、さらに21世紀に向って輝かしい伝統を守り、かつ知育・体育両面の充実をはかるため、かねてからの懸案でもありました新１号館（電子工学科および法人局事務室）15階建・鶴記念体育館（プール８コース・ソーラーシステム導入・屋内競技場・トレーニング室・観覧席等）３階建を建設する大きな記念事業を企画しました。61年秋の完工を目指して、２月末からすでに工事を始えております。

また、いまひとつの記念事業として、大学応援歌を制定することになっています。応援歌は学内縁故募集する基本構想で近く募集要項が発表されますので、皆さん奮ってご応募ください。入選作には相応の賞金も準備いたします。

おわりに、前述の母校記念事業建設所要資金約30億円のうちその１割相当の３億円を目標に寄付金を募ることになり、３月１日から募金を開始いたしました。いずれ趣意書がお手許に届きました節は、出費ご多端の折柄、恐れ入りますが、母校発展のため、また後輩育成の温情を込めて是非力強いご協力のほど、切にお願いいたします。

なおご寄付については、減免税の措置が受けられるよう手筈を整えております。

どうぞよろしくお願いします。

五三会皆さんのご多幸をお祈りします。

（広島工業大学記念事業事務局）

新任の御挨拶

広島工業大学建築学科助教授　浅野　昭雄

五三会の皆様には益々御健勝のこととお慶び申し上げます。さて、私は、昭和59年４月１日付で広島工業大学建築学科に赴任して参りました。間もなく一年を経過しようとする時期ですが、以下、私の略歴と、この一年間を振返って見て感じたことを簡単に述べ、それで御挨拶に代えさせていただきたいと思います。

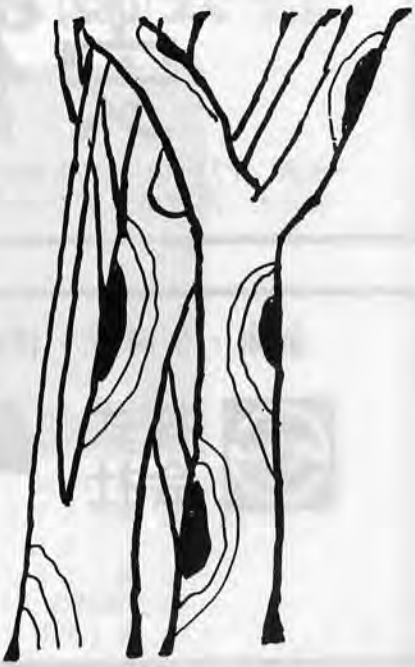
私は、昭和45年東北大学大学院修士課程（土木工学専攻）を修了し、すぐに東京大学地震研究所助手として赴任し、主に、地盤と構造物の動的破壊性状に関する研究を行い、更に、４年後の昭和49年11月より東北大学工学部土木工学科助手として、地中基礎構造物の地震時振動性状に関する研究、ライフラインの耐震信頼性の研究等を行ってきました。また、この間、伊豆半島沖地震、宮城県沖地震、日本海中部地震の震害を見てきましたが、これらの経験から、構造物の耐震性を考える上で、地盤の地震時挙動が大きな問題であることを教えられました。

以上の経緯を経て、広島に参りましたが、広島付近は地震発生頻度が少なく、防災上はめぐまれた環境にありますが、研究面ではデータが乏しいという点でハンディを感じています。しかし、過去にも広島で被害地震が発生したこともあり、また、近年の都市の膨張化に伴う、土地造成により、建築物の耐震性を考える上で多くの問題が生じており、防災上検討することがまだあるように思われます。

以上から、現在の研究の主なテーマとしては、いわゆる不整形地盤の地震時挙動を明らかにし、構造物の地震外力をどうとらえるかということを目的としたものであります。まだ、着任早々であり、設備も十分ではないのですが今後とも研究を進めて行くよう努力して行く所存です。

さて、この一年間、私は構造力学、耐震工学etc.の授業・ゼミを担当してきましたが、そのことで感じたことを一寸述べさせていただきます。私個人として授業に対して興味を持っており、学生諸君が授業にどのように対応してくれるか常に関心を払っていたのですが、学生諸君の授業の受け方に何か物足らなさを感じました。即ち、もう少し、主体性をもって欲しいと思うのです。当然ながら、授業の方法・内容にも問題があろうかと思いますが、卒業してから就職した後も、非常に大事なことであり、是非身につけて欲しいと思っています。そのためには、学生諸君に自覚をもっていただくことと、教師の授業、ゼミ等を通した指導が必要です。私は、研究者として、教師として大学で何をなすべきか常に考えながら、微力ながらも、今後の学科の発展、大学の発展のため努力していきたいと思っています。

五三会は、現在、3000名を越える会員数を有する大所帯となっているそうですが、何としても歴史が浅く、まだまだこれからもがん張って行かなければならない時期だと思います。そのためにも、会員の皆様が相互に情報を交換しあい、励ましあい、助けあって、同窓会を良い意味で利用され、益々、五三会が発展されますことを祈念する次第です。



編集後記

「五三会」会報紙第12号の発行にあたりまして、原稿をお寄せ下さいました方々にお礼を申し上げます。

また今回も多数のスポンサーの協力をいただき、どうもありがとうございました。

年々会員数が増え、会報誌の発行部数も多くなってくるに従って内容も充実して来ましたが、今以上の内容のあるものとするために、今後の会員の皆様のご協力をお願いいたします。

最後に社会で御活躍の皆様、今年新たに社会で活躍される皆様の御健闘を心からお祈りします。

「五三会」　第12号　編集委員

西　本　治　雄 (53)
小　川　雅　彦 (53)

広島工業大学建築学科同窓会誌

「五三会」第12号

編集責任者　西　本　治　雄

発行責任者　中　塚　晴　夫

印　刷　所　広島電話印刷

発　　行　昭和60年3月1日